

北京語における蟹摂 ie 韻の成立

中村雅之

1. 蟹摂 2 等牙喉音の韻母

元代の大都(北京)音における「街」「解」「皆」「介」などの韻母は、パスパ文字表記などから /-iai/ であったことが知られている。これらは蟹摂 2 等牙喉音字であるが、現代北京音ではいずれも /-ie/ になっている。一方、多くの官話資料¹⁾によって知られる明清の官話(広義の南京官話)では一貫して /-iai/ であり、19 世紀半ばにエドキンズ(J. Edkins)は蟹摂の /-ie/ 韻を官話とは異なる北京音の特徴ととらえた²⁾。

元代以来、仮摂 3 等(「写」「謝」「也」「野」など)や旧入声韻のいくつか(「節」「切」「葉」「別」など)が /-ie/ 韻であったが、北京音では蟹摂 2 等牙喉音がそれに合流したことになる。

2. 北京語の /-ie/ 韻

13~14 世紀に /-iai/ であった蟹摂 2 等牙喉音は、朝鮮の漢語教科書『老乞大』『朴通事』のハングル注音では「-iei」(河野式転写による)である³⁾。15 世紀半ばの北京音(ないし近隣の音)を反映する左側音も 16 世紀初頭の北京音を反映する右側音も変わらない。康熙年間(17 世紀後半~18 世紀前半)の『満漢千字文』の満洲文字表記は北京音の特徴が顕著であるが、そこでは蟹摂 2 等牙喉音は「-iye/-iyei」(メレンドルフ式転写による)である⁴⁾。19 世紀のエドキンズが蟹摂の /-ie/ を北京音としていることは上述の通りである。

満洲文字表記の「-iye」と「-iyei」はともに /-ie/ を表していると見て差し支えない。蟹摂以外の /-ie/ 韻についても表記のゆれがあり、両者に違いはなさそうである。

ハングル表記については、考慮すべき点がある。「写」「野」などの仮摂 3 等や「切」「葉」などの旧入声韻は全て「-ie」と表記されており、「-iei」とはなっていない。つまり、蟹摂の「-iei」は /-ie/ ではなく /-iei/ を表している可能性が高い。そうであるならば、蟹摂 2 等牙喉音の韻母は、-iai > -iei > -ie と変化したことになり、15 世紀半ば~16 世紀初頭のハングル表記が第 2 段階を、17 世紀の満洲文字表記が最終段階を反映していると考えられる。

¹⁾ 『賓主問答私擬』(マテオ・リッチ&ミケーレ・ルッジェーリ編、16 世紀後半)、『西儒耳目資』(ニコラ・トリゴー編、1626 年)、『官話文典』(フランシスコ・ヴァロ編、1703 年)、『清書千字文』(尤珍編、1685 年)、『官話文法』(ジョゼフ・エドキンズ編、1857 年)など。

²⁾ J. Edkins(1857), *Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*. Shanghai.

³⁾ 遠藤光暁(1990)『<<翻訳老乞大・朴通事>>漢字注音索引』(好文出版)による。

⁴⁾ 岸田文隆(1994)「パリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」について(1)」『富山大学人文学部紀要』21. による。

3. 規範的な表記としての「-iyai」

『御製増訂清文鑑』（1771年）の満洲文字表記では問題の韻母は「-iyai」となっている。『御製増訂清文鑑』の表記は果摂開口を非円唇の「-e」とする点では、官話よりは北京語の特徴を示すが、尖団の区別が厳密であること、そして蟹摂2等牙喉音に「-iyai」の表記を用いる点は南京官話を反映する表記と言える。これは『御製増訂清文鑑』の示す音形が北京音を参考にしつつも、南京官話音を規範として受け入れたことを窺わせる。

一般に、満洲文字表記の漢語音では、あまりにも北京語的な語形は避けられる傾向にある。「還 hái」「都 dōu」「没 méi」などは通常、満洲文字資料には表れない（それぞれ「huán」「dū」「mù/mò」に相当する音形になる）。蟹摂における*/-ie/*も北京語的であるが故に、『御製増訂清文鑑』の規範的な表記には用いられなかったということであろう。明清の資料には、官話資料と北京語資料とに截然と分類できるものもあれば、『御製増訂清文鑑』のように、両者を折衷した資料もあることに注意が必要である。